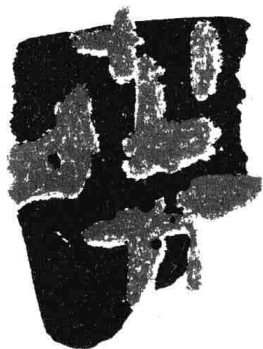


あじさいの歌

石坂洋次郎

あじさいの歌

石坂洋次郎



あじさいの歌 昭和三十五年一月十七日二刷 二十一日発行

著者 石坂洋次郎 発行者 佐藤亮一 印刷者 塚田 重

発行所 株式会社 新潮社 東京都新宿区矢来町七一

電話(34)七二一(五)
六八〇一(五)
(振替東京八〇八番)

定価 三二〇円

印刷所 塚田印刷株式会社
製本 神田加藤製本所

(瓦丁、落丁本はお取
替えいたします。)

あじさいの歌目次

捻挫

父と娘

葉山先生

案内人

赤い鶏頭

外の世界へ

揺らぐもの

暗い回想
(一)

……
七

……
三

……
四

……
七

……
九

……
三

……
六

……
三

暗い回想(二)……………一六

暗い回想(三)……………一六

虚と実……………三一

明暗……………三五

再会……………四六

招かれた人……………六〇

台風のとち……………六七

新しい出発……………三三

装
幀
香
月
泰
男

あじさいの歌

捻挫

むし暑いから梅雨の日の午後だった。

一人の若い男が、砦の高台にある閑静な住宅街を、のんきそうにぶらぶら歩いていた。黒い開襟シャツに黒のベレー帽、白っぽい木綿の縞ズボン、白の皮靴といった服装で、足は長く、そのわりに胸が短かく、一見して戦後派と分る体格をしていた。肩幅がひろく、めくり上げたシャツの袖口から現われた腕は、陽やけてしまっただけだ。しかし、顔つきはおだやかに整っており、殊に、目がすんでいて、深い光を湛えていた。

そんな風で、全体の様子に、普通の勤人などとはちがう、何か独創的な仕事をしている人間らしいスッキリした所があったが、ただ一つ野暮ったい点は、肩から流行のカメラをぶら下げていることだった。しかし、彼にとっては、カメラは、職業上の必需品だったのである。

さて、青年の名は河田藤助。年齢は二十七歳だ。芸術大学の図案科を出てから、きまっただ勤めはもたず、生来の才能を生かして、ポスターや本の装幀、レイアウト、時には

室内装飾の仕事を受けたりして、生計を立てていた。

独身だから、仕事の方は食べられるだけにして、余暇には、絵を描いたり、音楽をきいたり、文学書を読んだりして、自分の才能に栄養を注ぎこむように心がけていた。彼の考えによれば、商業美術のようなものでも、結局は、自然の美を、その目的に副うように再現することであり、それを怠っていると、かんじんの仕事も、マンネリズムに陥ってしまうのだ。

だから藤助は、外出する時はよくカメラをたずさえて、樹木、雲、花、家、川、人物、橋、道路など、目を牽かれた、さまざまな対象をフィルムにおさめて、自分の絵、ころを肥やすように努めていたのである……。

それにしても、このあたりの情景は、なんと都会ばなれがしていることだろう。煩さい自動車の往来もなく、踏み固められた赤土の道の両側には、厚い緑の生垣がつづき、どこも広い屋敷の中には、しいやけやきや杉や竹などが、伸びほうだいに伸びて、道をくらくらかげらせている所もあった。そして、住宅街とはいっても、五軒に一軒はまだわらぶきの百姓家が残っており、ケシやダリヤの花が咲いているそれらの百姓家の庭には、犬がねそべったり、鶏が胸をふくらませて、ときをつくったりしていた。

そういう中を歩いていると、藤助は、時間が十年も二十年もあと戻りしていくような気がした。

(昔の武蔵野というのは、きっとこんな気分のところだったんだ……)

樹が切られたかなにかして、西側の方の空間が、カラリとひらけている所があった。そこからは、崖の下の畑や水田や、それにつづく多摩川の川原、その向うの川崎の町や山林などが、遠くひろく見渡された。町には、工場や学校らしい近代建築も見えるのだが、それでも藤助は、自分は過去に生きていて、遠い二、三百年さきの、未来の幻影をのぞいているかのような錯覚を拭いきれなかった。

藤助は、口笛を吹きながら、緑に埋まった家の間の道を、ゆっくり辿っていった。その間に、二度ばかり、カメラをのぞいてシャッターをきったりした。

間もなく、右手の一隅に深い竹やぶがある四つ角に出た。西の方にかなり急な赤土の切り通しの坂が下りている。両側から、大きな老木の枝がおおいかぶさって、まるで緑のトンネルのようだ。

藤助は、湿った柔かい日蔭の道を踏んで、その坂を下りていった。と、坂の半ばごろの所で、右手に、崖をけずって作ったらしいわずかばかりの平地があり、そこにお稲荷さんの社がまつられてあった。石畳の参道があつて、くさりかけた赤い鳥居が二つほど建っている。それだけならなんでもないことだが、その石畳の上に、白いちぢみの単衣に黒い紹羽織を着た老人が、両足を投げ出して坐っていた。

かたわらには、ステッキと麦わら帽子、下駄などが投げ出され、少し離れた所に、赤い小柄な柴犬がうずくまっていた。

そこらの百姓家の老人が、散歩に出て、疲れたので、石畳にベタンと坐つて休んでいるのだ、と見れば見られないこともないが、しかし両足を投げ出している、太った老人の様子には、何かしら異常なものが感じられた。
(もしかすると頭が少し弱い人間なのかな……)

立ちどまつて、老人の方を眺めていると、老人の方でも藤助に気がつき、手をあげて呼びかけてきた。

「ああ、君、君、……そこらを流しの自動車を通らんじやろうか。見つかったら呼んでもらいたいんだが……」

「通りませんな。……僕はさっきから、ここらを歩きまわっていたんですが、自動車は一台も見かけませんでしたよ。しずかでない所ですな。……小父さん、どうかしたんですか」

藤助は、境内に入つて、老人の方に近づいていった。

「いや、散歩しているうちに、この石畳につまずいて転んで、足首を捻挫したようなんじゃない。……年よりつて、だめなもんじゃな」

傍で見る老人は、あかい、つやつやした皮膚をしており、眉毛が白く太く、鼻柱がたくましく、唇が厚く、目には鋭い光が宿っており、写楽の役者絵にでも見るような、アク

の強い顔をしていた。

「足がもつれるってことは、誰にだってあることですよ、……お宅は遠いんですか」

「いや、この近くじゃがな……」

「それじゃあ僕がおぶっていきましよう。お宅に落ちついたところで、医者を呼ぶなり、骨つぎに出かけるなりするんですな」

老人は迷惑そうに、顔をそむけて、

「君、自動車はほんとに見つからんのかね」

「御遠慮にはおよびませんよ。どうぞ僕の背中にのって下さい」

「遠慮ではない。僕は知らん人の世話になるのを好まないのじゃ」と、老人はぶしつけな調子で云った。

藤助はムツとして、このまま行ってしまうかしらんと考えたが、地面に投げ出された、老人のシミだらけの汚れた足に、蟻が二、三匹はい上っているのを見ると、急に哀れをもよおして、

「僕も、貴方の迷惑になることを無理にしようとは思いませんが……、一体どうなさいますかね……」

それに対して、老人は、ひとり言のようにつぶやいた。

「……自動車がくるか……百姓がリヤカーを曳いて通りかかればいいんだが……」

（負け惜しみの強い老人だ）と、藤助は呆れたが、それで

かえって、ふみこんだ気持ちにさせられて、老人の傍にしゃがみこんだ。

「さあ、行きましよう。僕は山登りが好きで、重い物を背負うのにはわりと慣れていますから……」

「君が……むりに……そう云うなら……」

老人は、藤助と目を合わせないようにして、きまりがわるそうに云った。藤助は、麦わら帽子をひろって老人にかぶせ、ステッキをもたせ、それから下駄を穿めてやろうとして片足をもち上げると、老人は、ピシヤリとその手を払いのけ、

「痛い！　こら、何をする。その骨がはずれているんだぞ……」

「そんなに痛いですか。じゃあ、下駄は僕がもっていきますから、ともかく、僕の肩につかまって立ち上って下さいよ……」

老人は、左足をいたわりながら、藤助の身体にすがって、そろそろと立ち上った。途中で二、三度うめき声をもらした。

藤助は、カメラを短かくバンドに結びつけ、老人を背中にのせると、傍のグラグラする鳥居の柱につかまって、やつとのことで立ち上った。そして、一步一步足を踏みしめて歩き出した。赤犬もあとからついて来た。

お稲荷さんの境内を出ると、あいにくと急な上り坂であ

る。背は低い、太った老人の身体の重みが、たちまち、藤助の背によろしやなくのしかかって来た。そして、ものの三分と経たないうち、藤助は、顔や首筋にビッシヨリ汗をかいて、苦しそうにフーフー喘いでいた。

汗と共に、人をいたわる心の余裕も押し流されてしまったように、藤助はただ、内臓にギリギリこたえてくる老人の重みだけを、いまいましく意識していた。

（もう働く年ごろでもあるまいのに、この老人は、なんだってこんなに重いのだ。それにまた、なんだって俺は、よけいな親切心などを起したんだ？ すなおでない、ひねくれ者の老人だと分ると、あの時は、たかが老人のひがみ根性に負けていられるものかと、妙な対抗意識を起して、とうとう老人を背中に負ってしまったのだが、何という馬鹿なことをしたものであろう。……）

胃袋や心臓や肝臓や全身をしめつける、この絶望的な重さ。いまにも目まいがしてぶっ倒れそうだ。――藤助は、老人でなく、重い後悔だけを背負っているような気がした。で、藤助は、苦痛を紛らすために、とぎれがちな言葉で老人に話しかけた。

「小父さん、重いんですね。目方がどれくらいあるんですか……」

「いまは十七貫くらいじゃろ」

「お年よりにはありますね。……なあに、僕は十七貫

ぐらいいは背負えるんですよ。ただ、小父さんの身体は、ちょっと背負いづらく出来てるんだな。十七貫の目方が、手や足や全身に、まんべんなくいきわたってれば、わりに扱いやすいんだけど、小父さんのは一と所に塊まつてる感じなんで、工合がわるいんですよ。漬物石を背負ってるみたいでね……」

「こら！ 人を漬物石とはなにごとだ。無礼だぞ……」と、老人は、背中の上でおどり上ってわめいた。

おかげで、藤助は、前のめりに倒れるところだった。

「重いことを形容しただけだから、怒らなくてもいいですよ……」

藤助は、だいぶずり下って来た老人の身体を、ゆさぶり上げた。それが足に触ったらしく、

「痛い、痛いぞ！ ……僕の足は骨折しているんだぞ。気をつけてくれ」

そう怒鳴って、老人は、両手に握っている黒塗の太いステッキをグイと手もとに曳いた。藤助にはそれが、老人がステッキで自分の首をしめようとでもしているように感じられた。

やっと坂道の上に出た。藤助は、意地にも我慢が出来なくなつて、道のかたわらの大谷石を積んだ垣根の上に、背負ったままで老人を下した。老人はまた「うう……」とうめいたが、さすがに今度は悪口を云わなかった。

藤助は、黒いベレー帽をぬいで、顔や首に滴る汗を拭いた。

「参ったな。近ごろこんな重いものを背負ったことがない……。小父さん、煙草をもつていませんか。自分のほつきカラになってしまったんで……。一服したくなりましたよ」

「あるよ」

老人は袂をさぐって、肩越しに煙草の袋をさしのべた。

それが、ビニールをひいた外国煙草の袋だったので、相手が百姓家の隠居だろうぐらいに思っていた藤助は、ちょっと意外な感じがした。

「……君はなんの仕事をしているのかね」と、背中の老人が、おだやかな調子で尋ねた。

「……一種の自由業ですよ」

「そうだろうな。まともな勤人だったら、いまごろ、こんなところをぶらぶらしているわけがない。自由業って……インチキな仕事じゃあるまいな」

「自分じゃあ、インチキでないつもりです……」

リヤカーを曳いた百姓の夫婦者が、老人に丁寧な挨拶をして通りすぎていった。リヤカーよりも、藤助の背中の方がいいと考え直したのか、老人はべつに、それを呼び止めようともしなかった。

老人は、自分も煙草を吸い出して、

「僕は、まともでない仕事をしている人間は嫌いでな」
そう云うのが、一般論でなく、自分にあてつけているように感じられたので、藤助は強い調子で、

「貴方の云う、まともでない仕事というのは、どんな風のものですか」

「——薬をして金をもうけようといった風の仕事だ」

「そんな仕事がありますかね。あったら教えてもらいたいのですが……。よそ見には薬に思われても、それで飯を食うということになると、薬な仕事なんてありませんよ。僕はまだ若いんですが、これまでの生活の実感として、そう思いますね。……そうだな、金貸しなんか薬な方の仕事になるのかな」

「馬鹿なことを云うな」と、老人はひどく力んで云った。

「世の中に、金貸しぐらい難かしい仕事はないぞ。君なんか、それを三月もやったら破産してしまうに決ってるわい」

「そんなもんですかね。そうでしょうねえ。僕なんか臆病者で、血も涙もないといったような催促の仕方は出来ませんからね」

老人は沈黙を守っていたが、それが一つの抵抗感として藤助を刺戟した。

「僕の考え方はまちがってはいましようかね」
「不十分だな」

「じゃあ貴方はどう考えているんですか」

「考えるなんて、生まぬるいもんじゃあない。——馬鹿な人間には、金貸しなど出来ん！……それだけの話だ」

藤助が老人の語氣に圧倒されて、口を閉じていると、老人はテレくさくなったのか、調子を柔げて、

「ところで、君はなんの仕事をしているのかね」

「商業美術というんですがね。ポスターを描いたり、本の装幀や雑誌の挿絵をかいたり、頼まれれば、室内装飾もやったりします。——まともでないでしょうかね」

「いや、頼む人間があるんだから、そういう仕事があつてもいいだろうな」と、老人はお義理のように云った。

「さあ、では行きましょう。……あの、お気の毒ですが、今度は、貴方も僕の背中の上で、手足に力を入れて、しがみついてもらいいたいです。らくちにされていると、こっちが重くてかないませんから……」

「君は、文句の多い男だな……」

藤助は老人をおぶって歩き出した。はじめの間、老人は手足に力を入れて、藤助の身体にしがみついていたが、疲れるとみえて、すぐに力をぬいてしまった。で、藤助はまた、漬物石のようにギリギリした、ぶあいそな重量を荷うことになってしまった。

「お宅はまだ遠いんですか」

「あと一町ばかりだ……」

途中で、三、四人の百姓風の男女に会ったが、みんな手拭いや帽子など、かぶり物をとって、老人に挨拶をしていった。

（何者だろう、この老人は——）と、藤助はふしんに思った。

少し行くと、左手の角に、けやきやかしやならの太木に囲まれた、大きな屋敷があつた。道路に沿うた外側には、よく茂ったヒバの垣根をめぐらし、その内側には、瓦葺の厚い土塀が、訪問者に対して腕をひろげたような感じで、延延とのびて内部の様子を隠していた。

正面の銅をはった重そうな扉も、何年来あけられたことがないといった風で固く閉じられており、内側の植込の樹木の間からは、古めかしい明治調の洋館の一部がのぞかれ、やはり銅葺の屋根には、青いさびがいちめんにふいていた。まだ農村の気分が残っているここの環境の中では、まるで別世界がとつぜん出現したかのような、奥ふかい異国的な眺めであつた。

（どんな人が住んで、何をしているのであろう……）

さっきここを通った時、藤助は、そんな風になつかしがりながら、屋敷の前にしばらく立ちどまって、うっそうとした太木の茂みや、青い銅葺の屋根の勾配などに見とれていたものだった。が、今度は背中の老人が重いので、そんな気持の余裕もなく、まめにこつこつとその屋敷の前を歩

いて通りすぎようとした。すると背中中の老人が、
「おい、君、君。何処へ行くつもりかね。僕の家はここじやよ……」

「そうですか……」

藤助は、なんのためらいもなく、古風な洋館の向い側にある、庭先にダリアやガーベラが咲いている、明るい農家の門口に歩いて行った。

「こら。何処へ行く——？ 僕の家は向い側じゃよ」

「向い側って……まさか……あの洋館ではないでしょうね？」と、藤助はあつげにとられて立ちどまった。

「僕が洋館に住んでいてはわるいともいうのかね……」と、老人は皮肉な調子で云った。

「いや。そのう……あんまり大きな屋敷なもんですから……さっき僕は、この前に立ちどまって、どんな人が住んでるんだらうと、勝手な想像をめぐらしたりしていたんです」

「誰が住んでると思ったかね？」

「いや。ハッキリした人物は思い浮びませんでした、もつと長く考えていけば、僕はまだ若いんですから、きつと、色の白い、しとやかな、若い女の人が住んでるかも知れない、と想像したことでしょう、きつと……」

「……君は、くだらんことを考える人間だな……」

老人は背中の上で、吐きすてるように云った。藤助は、

玉砂利の道を踏んで、土塀の門に近づいた。そして、老人に教えられて、かたわらのくぐりの扉を押して、内庭に入った。

そこからは、黒ずんだ煉瓦の歩道が、つばやつばきや竹などの植込みの間をまわって、ガッシリした古風な二階建の洋館の玄関に通じていた。

藤助は、自分がとんでもない人間を背負ってしまったかのような、かすかな不安を覚えた。

ふいに、間近かで、犬の唸り声がした。一匹でなく、二匹か三匹の重り合った不気味な唸り声だった。それに刺戟されたように、藤助達のあとについて来た赤犬も、塀の内側に向って吠え出した。

針が落ちてでも聞えるかと思われるほど、静まりかえった屋敷の中だっただけに、藤助は強いショックを受けて、思わず立ちすくんでしまった。背中に重い荷物を背負っていて、身体が自由に利かないということが、彼の恐怖を一そう強めたのかも知れなかった。

見ると、奥の庭園と植込みの空地をくぐる鉄柵の内側に、どれも身体が大きい一匹のマスティフと二匹の秋田犬が、荒い鼻息を吹きながら、険しい目つきで、こちらの様子を伺っていた。

老人がなにか声をかけると、犬どもは唸るのをやめて、代りに、うれしげな吠え声をあげながら、柵の内側を、狂

ったように走りまわった。老人の傍に近づこうとしているのだ。

（こんな老人でも、誰かが、こんな風に愛しているのかも知れない……）

そう考えさせられて、藤助の気持は、いくらか和やかになった。

その時、葛がはった、古びた煉瓦の建物の蔭の方から、「お前達、そんなに吠えて、誰がいらしたの。……お父さまがお帰りのかしら？」と呟いて、一人の若い女が姿を現わした。

豊かな長い髪を垂れ、色が白い、面長な顔立だったが、裾の長い、厚い地質の青のワンピース、黒い木綿のストッキング、白の運動靴といった服装は、一時代前のような野暮ったいもので、背が高いだけに一そう不恰好に見えた。何というか、街で見かける、派手でビチビチした感じの娘達とは、まるでちがった感覚で生きているとしか思えない。——美術家だけに、藤助は、一目見てそんな風に感じた。

娘の方は、藤助の背中におぶさった老人を見ると、驚きのあまり、両手で自分の頬をはさんで、

「あら。お父さま。どうなすったの。……急にお加減でもわるくなったの。……その方、どなた……」と、藤助の傍に駆けよって、老人の背中に手をかけた。

「なんでもないんだ。つまずいたはずみに、ちよつと捻挫しただけなんだ。ギャアギャア騒ぎ立てるな……」

老人は不機嫌そうに云った。

娘は、さきに立って、ゆるい螺旋形の石の階段を五、六段かけ上り、鉄の飾りをむやみに打ちつけた、重そうな玄関の扉の横の呼鈴を押した。にぶいベルの音が、しばらく、家の中にこもって聞えていたが、やがて、内側からかけ金を外す音がして、扉が開いた。

そこには、色の褪めた青い仕事シャツと、半分ぐらいも折り返したデニムのズボンをつけ、胸当てのついた前かけをした、頭が禿げ、鼻の頭が赤い小柄な老人と、鼠色の厚ぼったい服にやはり黒の木綿のストッキングをつけ、白髪のまじった髪をキッチリ束ねた、ガッシリした身体つきの老婦人が立っていた。

「旦那さま。どうなさいました……」

「ほんとにまあ……」

夫婦者らしい二人の年よりの男女は、口口に、脅えたような調子で物を云った。

「つまずいて、足首を捻挫したんですって……。湿布をしますから、早く濡れタオルをもってらっしゃい」と、身体の不恰好に長い娘が云った。

藤助もそれにつづいて、

「それから、板ぎれと繻帯をお願いしますよ。病院に行く